

民族、言語、および開発 - アフリカ地域研究の建設的「越境」のために

著者	高橋 基樹
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2010-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008077

doi: 10.24765/africareport.50.0_35

民族, 言語, および開発

— アフリカ地域研究の建設的「越境」のために —

高橋基樹

はじめに

20世紀以降, 社会科学・人文科学の各分野は著しい専門化・細分化を遂げた。そうした状況の中で, アフリカ地域研究には, 今後どのような存在意義があり, どのようなあり方が求められているのだろうか。本稿では, 経済学とその他の分野の関係に注目してそのことを考えてみたい。

過去, アフリカの経済開発をめぐる研究は, いろいろな意味で分野的な「越境」を志向してきた。1980年代までの「越境」は, 新古典派経済学の論理を押し通して, 政治など経済以外の分野のことを説明しようとする「領土侵犯」の性格を帯びていた。その後, アフリカ経済開発をめぐる研究の「越境」は, むしろ, 経済現象の説明のために政治を始めとする経済以外の要因を考慮しようとする方向に変わってきた。それは, 主流派経済学に生じた経済外的要因への関心の拡大と関連しているだろうし, 構造調整政策が, 経済の論理だけを貫徹しようとして失敗したことへの反省にも促され

ているだろう。

上のような学問的な「越境」の変化のなかで, 近年エコノミストたちが関心をもった, 経済外的なことがらの一つが, 民族問題である。以下では, 民族問題とそれに密接に関わる言語, および経済開発をめぐる議論を概観する。そのことを通じて, アフリカの開発をめぐる, 学問的な「越境」の問題点と, アフリカ地域研究の役割について論じていこう。

1. 経済成長論と民族言語多様性指標

1990年代から, 多くのエコノミストがアフリカの低成長の理由を明らかにしようと, 研究成果を次々と発表した。その中で注目を集めたのが, イースタリーとレヴィーンの手になる「アフリカの成長の悲劇: 政策と民族の分断」(Easterly and Levine[1997])という論文である。この論文については, 既に取り上げられているが(福西・山形[2003]; 浜口[2008]; 平野[2009]), 経済学の「越

境」を考えるうえで格好の論文だと思われるので、筆者なりに論評してみたい。

「アフリカの成長の悲劇」の主張は、アフリカの国々は民族的に多様であり、そのことが低成長の要因である、という点にある。アフリカの国々は、民族多様性のゆえに経済開発に必要な政府の政策（公共財の供給など）について社会的に合意することができない。そのことが、東アジアなど他の地域に比べて成長が低いことの主因の一つなのである。たしかにアフリカ各国には一般的に多くの民族集団があり、その不和や対立が問題として語られてきた。1990年代には、アフリカほか各地で民族紛争が生じ、冷戦後の世界では民族的・文化的なアイデンティティこそが人々の対立軸になるとの見方が力を持った。この論文への注目には、そうした背景が影響していただろう。

「アフリカの成長の悲劇」の主張の具体的根拠は、民族の多様性の指標が高くなるほど、経済成長率が低くなる、という計量経済分析の結果である。この分析を行うために、同論文は全世界の国のそれぞれの民族多様性に関する定量的な指標を用いた。その指標として用いられたのが、テイラーとハドソンが1972年にまとめた『世界政治社会指標ハンドブック』(Taylor and Hudson[1972])に載っている各国の民族多様性に関する指標である。ある国の民族が多様であればあるほど、個々人が異なる民族のメンバーと出会う確率は高くなるはずである。そこで、テイラーらは、各国の民族の多様性を数字で表すにあたり、ある人が、同じ国民の中に異なる民族に属する人を見出す確率を計算し、それを指標とした。この確率は、その国の任意の2人が同じ民族である確率(各民族の構成比の2乗にほぼ等しい)の総和を1から引いたものとして計算できる^{†1}。国民がそれぞれ全く違う民族に属していれば、この指標は1になり、

全員が同じ民族に属していれば0になる。実は、この指標はテイラーらの独創によるものではなく、アフリカ言語研究者グリーンバーグが、言語の多様性の指標として1956年に行った提案に基づいている(Greenberg[1956])。

さて、この指標の計算のためには、各国の民族構成比を知らなければならない。そこでテイラーらが用いたのが、旧ソビエト連邦のミクルホマクライ民族誌学研究所が1964年に刊行した『世界民族アトラス』(Институт Этнографии[1964])だった。同研究所は、ソ連邦内の各民族の特徴を調査するために設けられた機関である。その調査結果は、スターリン時代に民族の単位に合わせて「共和国」「自治共和国」を設置するという国策のうえで非常に重要な意味を持ったが、そこで、民族の特徴として重視されたのが言語である。『世界民族アトラス』は、それと同様に言語を基準とした民族の分類調査を世界中で展開したものである。同書は言語を基準とする理由を、人々にとって独自の言語を失うことが、他の民族に同化したかどうかを判断するのに最も重要な点だからだ、と説明している。同書では、アメリカ合衆国のような場合を除き、アフリカを含む全世界の国・地域について言語を基準として民族を分類し、それぞれの人口を示している。そのため、同書のデータを用いてテイラーらが計算した指標は「民族言語多様性指標」と呼ばれている。

『世界民族アトラス』のデータは、後年の民族

†1 具体的には、ある国の民族多様性の指標Fは次のように計算できる。

$$F = 1 - \prod_{i=1}^n \left(\frac{n_i}{N} \right)^{n_i - 1}$$

ただし、Nはその国の全人口、nは民族iの人口である。

表 民族言語多様性指標の地域ごとの平均

地域	国の数	平均指標値
サハラ以南のアフリカ	38	0.728
ソ連・東ヨーロッパ	9	0.519
アジア・太平洋	17	0.448
先進国	23	0.273
中東・北アフリカ	17	0.262
ラテンアメリカ	25	0.198

(出所) 高橋[2010]より転載。

(注)「平均指標値」は、テイラーとハドソンが計算した計129カ国・植民地等の民族言語多様性指標(Taylor and Hudson[1972]参照)を、その原データである『世界民族アトラス』(Институт Этнографии [1964])に掲載された各国等の人口によって、地域ごとの加重平均として算出したものである。

分類に照らし合わせるとやや粗いが、大きな誤りや食い違いはなく、何よりも全世界を網羅していることが貴重である。そのことから、当時のソ連政府がこの調査に置いていた重要性が推測できる。おそらく、冷戦が第三世界に拡大していく時代の政治的要請が作用しているだろう。このデータは西側でも信頼され、テイラーらがそれを用いることにもなった。そして、イスタリーたちの論文の前後に、民族多様性を要因として、経済成長以外にも、紛争や政治的状况などを説明する論文が続々と発表されたが、それらも同じ「民族言語多様性指標」を用いたのである。

上の表では、テイラーらが計算した各国の「民族言語多様性指標」を、『世界民族アトラス』の各国の人口データにより、地域ごとに加重平均したものを示している。たしかに、アフリカの同指標の値は他の地域よりかなり高くなっている。

さて、そもそもグリーンバーグが問題の指標を提案したのは、「全く異なる諸地域についての比較を可能にし、政治、経済、歴史、その他の非言語的要素と言語多様性のさまざまな程度との相関

を考える」(Greenberg[1956: 109])ことを目指したからである。彼の企図には、長い歳月を経てイスタリーらにより、やや違ったかたちではあるが、光が当てられることになった。

2. アフリカの言語の複雑な諸側面

「アフリカの成長の悲劇」は、その後活発な議論を引き起こした。特に、民族問題を経済や政治の考察に取り入れるにあたり、「民族言語多様性指標」を用いることには多くの批判がなされた。それだけで1冊の書物ができるほどのかまびすしい議論が行われてきたが、その批判の中に、「民族言語多様性指標」は言語の親疎の程度や「多言語の併用状況」を考慮できていない、という言語に関わる2点の批判がある。

比較言語学で明らかにされた言語系統を考えればわかるように、各言語間の近しさ・遠さにはさまざまな差がある。例えば、ケニアのキクユ語をはじめとするバントゥー系の中央ケニアグループの諸「言語」は、互いに会話が可能で方言連続体と見なしていいほど近いけれども(品川[2009])、キクユ人と接して暮らすマサイ人の言語は、バントゥー系諸語が属するニジェール=コンゴ語族とは異なるナイル=サハラ語族に属しており、キクユ語からはかけ離れている。「民族言語多様性指標」は、どの民族の間の親疎も同一に扱っており、これでは、民族問題の重要な側面を捉えることができないだろう。

加えて、アフリカの人々それぞれが話す言語は一つではない。多くの人々が第1言語のほかに、隣接する集団の言語を複数話し、さらにリンガ・フランカ(集団間の共通語)を操っている。

たしかにアフリカの言語数は約2000ともいわれ、世界で最も多様であり、表にもそのことが表

れている。しかし、近しい言語集団間の会話可能性や多言語の併用状況を考えればわかるように、言語の多様性は、アフリカの民族どうしの交流の欠如や不和を直ちには意味しない。むしろ、上で述べたことは、「民族言語多様性指標」を見てもうかがい知ることのできない重層的なコミュニケーションが、アフリカの人々の間で日々交わされていることを意味しているだろう。

言語間の親疎の程度と多言語併用状況の重要性は、グリーンバーグ自身が既に1950年代に認識していたことである。言語の多様性指標を提案するにあたり、彼は、この2点を勘案して指標を精緻化するべきことを指摘している。ただ、テイラーらは「民族言語多様性指標」を計算するにあたって、データの欠如のため、彼の言う精緻化は難しいとした。

3. 民族と言語の相互関係と流動性

既に述べたように、『世界民族アトラス』の編纂にあたった人々の理念は、言語は民族を規定する決定的な要因だということにある。その理由とされた、独自の言語の喪失は民族の同化を意味するという見方は、マルクス・エンゲルスから、カウツキーを経てレーニンに至る、マルクス主義の伝統を反映している。若きマルクスとエンゲルスは資本主義の発展とその後の共産革命を通じた諸民族の融合を夢見た。この伝統に忠実だったカウツキーは、民族の最も重要な要素である諸言語がいつしか世界語に統一され、マルクスらの理想に近づくことを期待したのである。民族の原理によらないソ連邦の統合のために、レーニンは、カウツキーの考えを支持した(田中[1978])。

マルクス主義の、民族は同化し、融合しえるとする考えは、民族は近現代史の産物であり、流動

的なものである、という構築主義を先取りしたものかもしれない。構築主義は1980年代以降、人類学や政治学で広く受け入れられるようになった。

言語はたしかに民族の構成要因として重要だろうが、民族と言語が単純に対応し合うとする考えには、いくつかの反証がある。ツチとフツが同じ第1言語を話すルワンダ・ブルンジの例は挙げるまでもない。また、人々の第1言語が別のものに移り変わる「言語交替」は、アフリカで広範に観察されている。各地域で、例えばスワヒリ語やウォロフ語などが都市を中心に浸透し、子どもたちが、親の世代とは異なる言語を第1言語として身に付けている。言語もまた流動的なのである。ただ、言語の流動は民族の流動と同じではなく、言語交替が起こったからといって民族的アイデンティティが消滅するわけではない。その点で『世界民族アトラス』の想定は事実から外れている。

「アフリカの成長の悲劇」は、ここまで述べてきたような民族や言語自体に関わる論点(民族と言語の親疎、多言語併用状況、民族と言語の流動性と不一致など)への視点を欠いている。「民族言語多様性指標」の背後にある、民族や言語に関わる長い議論の歴史を顧慮した形跡もない。残念ながら、そこに冒頭で述べたような学問の細分化の影響がのぞいている。「越境」の必要性を唱えながら、現代エコノミストの関心は、もっぱら成長などの経済現象を、定量化できる経済外的要因を用いて説明することに置かれてきた。そこで経済外的要因の背景や具体的なありようにはあまり関心を払わず分析に持ち込んでいる場合が多いように思われる。

ここで、アフリカ政治研究の泰斗ヤングの、民族は政治や経済に影響を受けて状況依存的に流動するものであり、今後の研究はその流動のあり方の解明に向かわなければならない、という指摘を思い起こしたい(Young[1994])。この指摘の「民

族」を「言語」に置き換えても、同じことが言えよう。ヤングの指摘にしたがうのであれば、民族や言語を規定する要因を捨象して所与のものとしてしまうのではなく、経済や政治が民族・言語にどのように影響し、逆に影響を受けるのかという双方向の視点を持たなければ、研究は十分に包括的なものになりえないだろう。

おわりに

21世紀に入り、イースタリー自身を含むエコノミストたちの議論は次第に、すぐ上で述べた双方向的な影響を正面から扱う方向へ展開しつつある。しかし、その行方は未だ霧の中と言ってよいだろう。明らかなことは、エコノミストには、かつての「領土侵犯」的態度から離れ、民族問題や言語問題を、各専門分野から謙虚に、しかも深く学ぶ姿勢が必要だ、ということである(同様のことは他の分野の研究者にも、もちろん言えるだろう)。エコノミストたちが特に民族に関する専門的研究について参照することも増えており、民族・言語の親疎の程度や多言語併用状況にも遅ればせながら、議論が及びつつある。アフリカに向き合うには幅広い知識が必要だ、という当たり前の真理がようやく再認識されるようになったと言ってよいかもしれない。ただ、包括的なアフリカへの研究アプローチは、もはやエコノミストの真摯で謙虚な「越境」だけで行えるもの、行うべきものではない。むしろ、必要なのは、アフリカ地域研究における対話と協働の場を構築することではないか。それが可能になれば、アフリカ地域研究は学問の細分化という20世紀の遺産の超克に一步を踏み出すことができるだろう。

(本稿の執筆にあたっては、神戸大学大学院国際

協力研究科の出町一恵、若林真幸の両氏にお世話になった。また本誌の査読者に貴重な指摘を頂いた。記して感謝に代えたい。)

【参考文献】

- 品川大輔 [2009] 「言語的多様性とアイデンティティ, エスニシティ, そしてナショナリティ」(梶茂樹・砂野幸稔編著『アフリカのことばと社会 多言語状況を生きるということ』三元社) pp.309-348。
- 高橋基樹 [2010] 『開発と国家 アフリカ政治経済論序説』勁草書房。
- 田中克彦 [1978] 『言語から見た民族と国家』岩波書店。
- 浜口伸明 [2008] 「民族の多様性と調和の経済学 主要文献のレビューから」(『経済経営研究所年報』58号) pp.27-48。
- 平野克己 [2009] 『アフリカ問題 開発と援助の世界史』日本評論社。
- 福西隆弘・山形辰史 [2003] 「アフリカ諸国の経済成長」(平野克己編『アフリカ経済学宣言』アジア経済研究所) pp.25-65。
- Easterly, W., and R. Levine [1997] "Africa's Growth Tragedy: Policies and Ethnic Divisions," *Quarterly Journal of Economics*, Vol.112, No.4, pp.1203-1250.
- Greenberg, J. H. [1956] "The Measurement of Linguistic Diversity," *Language*, Vol.32, No.1, pp.109-115.
- Институт Этнографии им. Н. Н. Миклухо-Маклая Академия наук СССР (Институт Этнографии) [1964] *Атлас Народов Мира*, Москва. ソ連科学アカデミー ミクルホ・マクライ民族誌学研究所 [1964] 『世界民族アトラス』: モスクワ .
- Taylor, C., and M. Hudson [1972] *World Handbook of Political and Social Indicators*, New Haven: Yale University Press.
- Young, C. [1994] "Evolving Modes of Consciousness and Ideology: Nationalism and Ethnicity," in D.E. Apter and C.G. Rosberg eds., *Political Development and the New Realism in Sub-Saharan Africa*, Charlottesville: University of Virginia Press, pp.61-86.

(たかはし・もとき / 神戸大学大学院国際協力研究科)